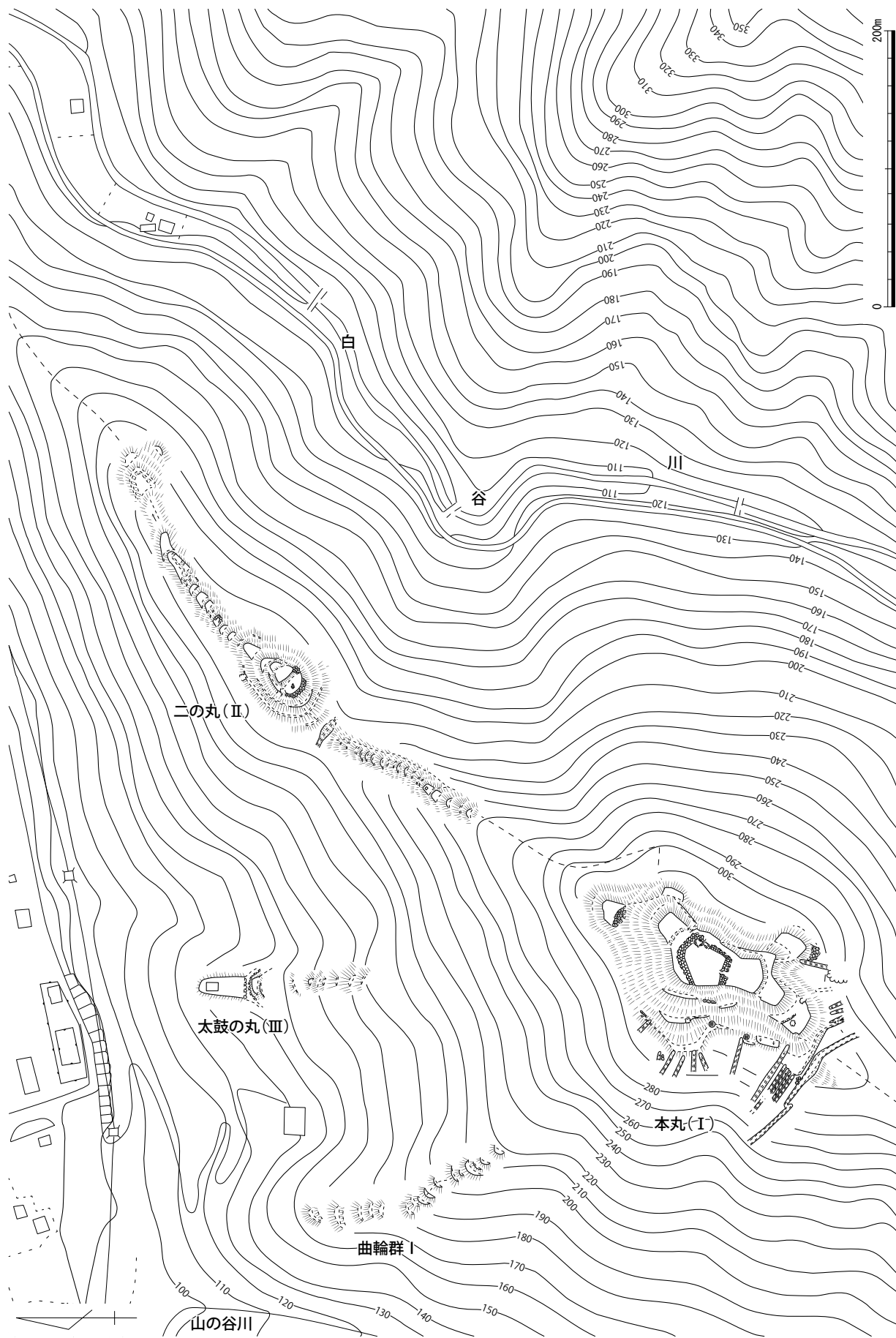


立地 鶴首城跡は高梁市成羽集落を見下ろす、標高 320 m の鶴首山山頂から尾根筋にかけて位置する。成羽集落（中世当時は成羽郷）からの比高差は 240 m を測る。集落に近い太鼓丸からの入山路を経て本丸（Ⅰ）に至るには、二の丸（Ⅱ）を越え、尾根筋を伝って登坂する以外にない。城の北に面して成羽川が東流し、城から東 5.6 km の地点で高梁川と合流している。成羽川沿いには古来、備中と備後をつなぐ要路が走り、東城、三次といった備後北部の要衝に通じていた。加えて成羽川は古くから河川交通が盛んであった。城から西へ約 13 km 遡った場所に重要文化財「笠神の文字岩」があり、鎌倉時代の徳治 2（1307）年、難工事の末に船路開発に成功した経緯を記した碑文が刻まれている。中世前半には、後の高瀬舟に通じる船運が開かれていた証左と言えるだろう。さらに城の東から南にかけては成羽川へ向かい北流する、白谷川により東の愛宕山山塊から隔絶される。城の西は山の谷川が北流し、天然の堀となっている。この城はこれら谷河川を取り入れて防衛線としているものと思われる。以上、鶴首城跡は備中国中央部の陸路・船路を押さえる、天然の要害として成羽郷に君臨していた。

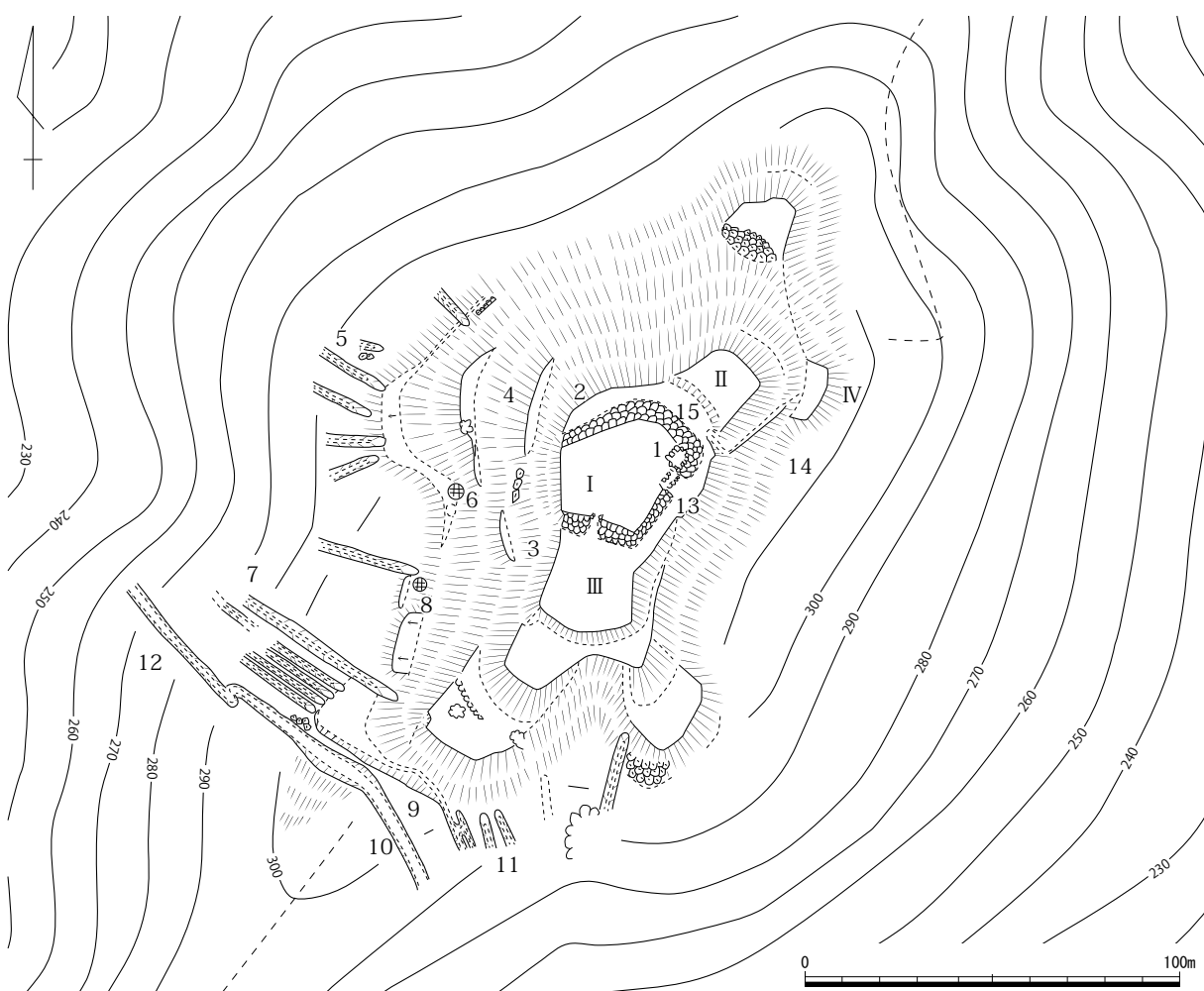
概要 城域は南北 500 m、東西 560 m を測り、備中国では備中松山城跡と並び最大規模の山城である。城は鶴首山山頂から北東方向に向けて扇形に展開する連郭式山城である。山頂に本丸（Ⅰ）を構え、その北東 400 m の地点に二の丸（Ⅱ）を、北 300 m の位置に太鼓の丸（Ⅲ）と呼ばれる曲輪を設けているが、これらは接続するのではなく、個別に 10 m²～30 m² の小さな曲輪群を伴い、相互に独立して築かれている。だが、このことはこれら曲輪群が別個に機能していたということを示すのではない。まず、二の丸は成羽川下流方向に向かって北東に位置し、30 m を優に越える曲輪群を連ねている。明らかに高梁川下流方向への防衛を目的とした曲輪群と言えるだろう。その西の太鼓の丸は、城内で唯一成羽川の上流、下流の両方向へ眺望がきき、敵軍の動きを知らせる見張り台的な機能を果たす曲輪と言えるだろう。なお、今回の調査で太鼓の丸の南側と、その西の尾根筋にも曲輪群が展開していることが明らかとなり、本丸から見て北西、北、北東の全ての尾根上に曲輪群が展開していることが判明した。このうち曲輪群Ⅰは西に山の谷川を望みながら登坂する尾根上に築かれ、現状で 15 の小曲輪からなる。これら曲輪群は最大でも 10 m² を超えることがなく、1、2 名が籠もるか、旗指物を置く程度でのものであったと思われる。そして本丸はこれら曲輪群からはやや離れた鶴首山山頂に位置する。後述するとおり、本丸は高い切岸と虎口、畝状縦堀群、横堀、縦堀と接続する複雑な形状の堀切により防衛される堅固な要害である。さらに本丸の主郭は野面の石積みにより区画され、礎石と考えられる石も点在することから、建物の存在を想定できる。と同時に、成羽集落から鶴首山山頂を見上げた本丸は、集落の拠点として人々の目に写り、支配のシンボルとしても機能したであろう。このように、鶴首城跡の曲輪群は山塊全体に展開しつつ、総合的に城全体の防衛力・象徴性を高めていたことにこそ、その特性を見いだすことができる。

なお、本丸から南西におよそ 1 km 離れた位置に、鶴首城の溜め井とされる通称「武士池」と呼ばれる池がある。しかし、後述するとおり本丸にも水の手として井戸が二つあり、城と「武士池」との間の山道には明確な防衛施設が存在しない。「武士池」と鶴首城の間の距離は、備中松山城の小松山城と大池の間の距離の 2 倍超に相当することと合わせ不審な点も多く、両者の関係性についての判断は保留にしたい。



第 107 図 鶴首城・古鶴首城跡縄張り図 (1/4,000)

次に本丸の構造を見ていこう。本丸は全長 140 m を測り全部で 8 面の曲輪群からなる。本丸は周囲から 8 ~ 10 m を測る急峻な切岸により突出している。本丸中央にある主郭 I は平面六角形で、南北とも 30 m を測る。現状で 4 つの礎石が見られ、そのうち三つは南北に並ぶことから、礎石建ちの建物が建っていた公算が大きい。主郭はその周囲に高さ 1 m の野面の石積みを伴う。石積みは主郭を全周せず、さらに立ち石の使用も見らない上、北側はシノギ積みとなっている。主郭北東隅には 5 m 四方の石積みを伴う高まり 1 があり、形状から見て櫓台と見られる。主郭の北は 2 段に造成される曲輪 II が、南には方形の曲輪 III がある。曲輪 III の南西から南東にかけて 3 面の曲輪が階段状に造成されている。比高差はそれぞれ 7 m を超える。主郭西側には幅 2 ~ 5 m の犬走り 2、3、4 がある。ここから一段下がった位置に畝状縦堀群 5 が展開する。本丸南西には全部で 7 本からなる畝状縦堀群 7 と井戸 8 がある。本丸は 2 条の堀切 9、10 により後背の丘陵から切断される。堀切 9 の東端は横堀を交えて畝状縦堀群 11 と接続している。また、堀切 10 は全長 60 m を測る長大なものである。その北西側隅は縦堀 12 と接続してさらに 50 m も続き、ほぼ完全に丘陵を切断している。これら防御施設は極めて技巧的と言え、本丸の西から南に掛けての守りを固めている。一方、城の北の守りを固めるのは連続する虎口と櫓を組み合わせた強力な防御施設である。城北側からの進入路である北東隅の虎口 13 へ到達するには、曲輪 IV から犬走り 14 を通ることとなる。その間曲輪 II から横矢がかかる。ここを突破しても虎口 15 が待ち受ける。主郭 I に入るにはここで 2 回折れ、主郭 I 北東隅下の隘路

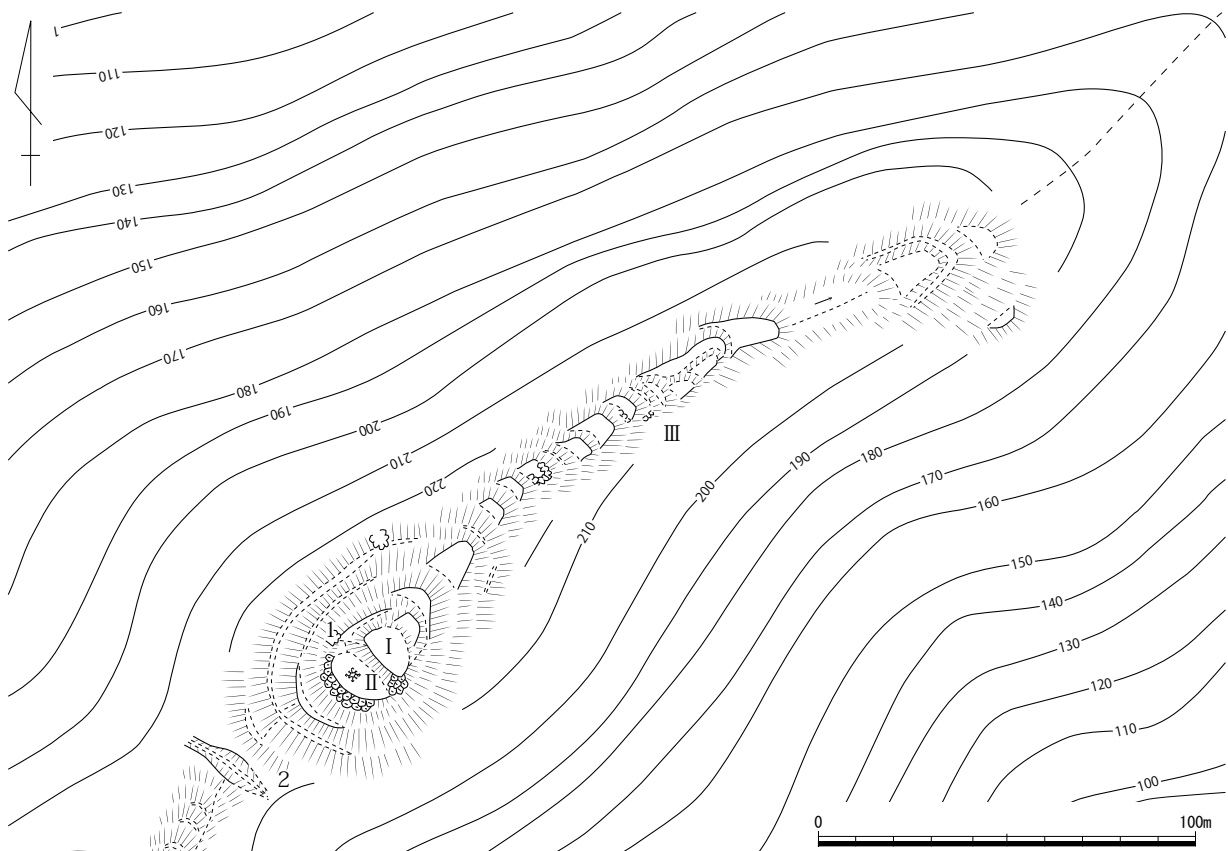


第 108 図 鶴首城跡本丸縄張り図 (1/2,000)

を進む以外にない。さらに虎口 13 でもう一度折れ、進入路は都合 3 回折れることとなる。しかも曲輪Ⅱに進入以降、常に櫓 1 からの横矢に曝され続ける。加えて、虎口 13 のすぐ南側に礎石が見られ、この位置に門が建っていた可能性が高い。このように、北方向から主郭Ⅰへ入るのは極めて困難であったと想像できる。前述したとおり、本丸東方向は白谷川により隔絶されているだけでなく、極めて急峻であり、その登坂は困難であったと思われる。

次に二の丸について述べていこう。二の丸は標高 220 m の尾根上に位置する。主郭面は周囲から 8 m を測る切岸により突出し、曲輪Ⅰ、Ⅱの 2 面からなる。曲輪Ⅱには井戸 1 があり、その曲輪の南辺と北東隅に野面の石積みが見られる。主郭面の北西から南に掛けては 3 重の犬走りが巡る。二の丸の南西は比高 2 m を測る堀切 2 により丘陵から切断されるが、本丸方向に向かって曲輪は連続している。二の丸の北西方向には 9 つの郭面Ⅲが階段状に造成されている。各曲輪群の比高差は 1.5 m ほどに収まり、地山の緩い傾斜に従って築かれていることがわかる。尾根の先端に向かうにつれ、曲輪の面積が大きくなる傾向にあり、最も大きな曲輪は長さ 20 m を超える。その先端は自然地形に近く、明確な造成の痕跡を見いだしがたい。

さて、位置関係から、二の丸は成羽川下流方向への守備を担った曲輪群と考えられる。先述したとおりほぼ山麓から本丸へ向かって、30 面を超える曲輪群を連ねて防御を固めている。二の丸の主郭面はその中核に当たり、尾根の鞍部に位置し眺望にも優れることから、この方面の指令所的な機能を担っていたと推察される。また、堀切を超えて本丸へ向かって曲輪が続くことから、鶴首城の基本的な縄張りにおいて二の丸と本丸をつなぐラインが防御線として最重視されていたと推察される。本丸についても北東方向からは 2 重の虎口と、連続する横矢により、その侵入を強力に防いでいたことは



第 109 図 鶴首城跡二の丸縄張り図 (1/2,000)

先述したとおりである。つまり、鶴首城跡は北東方向からの進入に対して、その強固な防御機能を発揮できるよう縄張りされているのである。

ところで、二の丸の主郭についてその単純な構造から、鶴首城跡に先行する古い山城の痕跡であるとの教唆を島崎東氏から得た。確かに二の丸の主郭は、堀切と切岸のみで防御する中世前半期の城と見なせなくもない。島崎氏はまず鶴首山鞍部にこの二の丸の母体となる城が築かれた後、戦国期に至って本丸を山頂に移し、連郭式山城として改造したという。発掘調査を経ないとは詳細は明らかにはできないが、この説を採る場合、二の丸主郭を古鶴首城跡と呼ぶことは許されよう。

文献・伝承 『備中府志』では鶴首城の築城者として河村四郎清秀の名を挙げている。清秀は源頼朝による奥州征伐の際の軍功により、備中国成羽に知行を得、この城を築いたという。時に文治5(1189)年のことと伝える。ところで、この鶴首城と言う名称も、元和元(1615)年に成立したとされる軍記物、『備中兵乱記』が初出である。一次資料での呼び名は成羽城、成羽の城、あるいは成羽である。しかも、『備中兵乱記』中にも成羽城と呼称され、混乱が見られる。

『川上郡誌』では天文2(1533)年、備中国星田荘から成羽へ転進した三村家親が入城し、城域を拡張したとする。先述の島崎氏の説に従うなら、連郭式山城としたのはこの家親入城の際のことであろうか。家親は毛利氏傘下となり、この城を根城に備中国の制覇に乗り出す。永禄4(1561)年に、家親は備中松山城へ移り、この城を一門衆の親成に任せた。このころから一次資料にもその姿が見え始める。永禄2～4(1559～1561)年、安芸国の毛利隆元が側近の赤川元保・児玉就忠にあてた書状にその名が見えるのが初見である。

さて、鶴首城は天正2～3(1574～1575)年に勃発した備中兵乱の舞台として再び記録に登場する。天正2年12月25日付けで巖島神社神主の棚守左近衛将監あて発給された『小早川隆景書状』によれば、翌日中には手要害(国吉城)、成羽城(鶴首城)へ攻め寄せることを決めたと伝えている。翌天正3(1575)年正月7日付け『吉川元春感状』によれば同日までに成羽城(鶴首城)が開城・撤退していたことが記されている。同年6月には備中松山城が落城し、その後の論功行賞において鶴首城主の地位は親成に安堵された。

天正7(1579)年、備前国と美作国の一部を治めていた宇喜多直家は毛利氏と断交して、織田信長と同盟を結ぶ。ここに備前・備中・美作国は毛利・織田(宇喜多)両勢力の緩衝地帯として緊張状態となる。天正10(1582)年4月28日付けで国吉城主の口羽少輔重郎宛に発給された『毛利輝元書状写』によれば、4月25日に賀陽郡冠山城が攻め落とされるにおよび、国吉城、成羽城、備中松山城の守りを固めるよう指示している。鶴首城本丸に見る技巧的な畝状堅堀群や堀切、石積みを伴う主郭、二つの虎口と櫓を組み合わせた防御線の構築は、その形態から見てこの際に改造されたものである公算がある。

鶴首城の廃城時期について記す一次資料はない。『川上郡誌』では元和3(1617)年に鶴首城城下の成羽陣屋に山崎家治が入封したと同時に廃城となったとする。本丸主郭Iの石積みの築石は、曲輪Ⅱ、Ⅲに散在している。石積みは特に隅角が集中的に破壊され、破城を受けたことは明らかである。これは元和元(1615)年に発布された一国一城令に対応した処置と思われる。一方、成羽陣屋の一部の石垣隅角部は算木積みと角脇石の充填が良く発達しており、築城開始は備中国が幕府領であった慶長期まで遡る可能性が高い。これらの状況から鶴首城は元和3年を遡り、元和元年までには廃城となっていた可能性が高い。(和田)



写真 38 遠景 (北から)



写真 39 本丸主郭 I 石積み (南から)



写真 40 本丸畝状竪堀群 5 (南東から)



写真 41 本丸堀切 10 (北西から)



写真 42 本丸虎口 13 (西から)



写真 43 本丸虎口 15 (西から)



写真 44 二の丸曲輪 I (南から)



写真 45 太鼓の丸 (南から)